

学校保健

家庭の環境を高めながら子どもの主体の育ちに迫る

—健康づくりを「^{わざか}技化」する実践から—

雨宮 恵子

1 はじめに

本稿の目的は、内的理論に立つ教育の観点から、組織マネジメントの視点をもって家庭の環境を高めながら子どもの主体の育ちに迫る健康教育実践のあり方を考察することである。子どもの主体が育つ健康教育とするには、子ども一人ひとりが日々の生活の中で繰り返しの体験ができ、その内面世界で実感と納得とを重ねることができるようにすることが重要と考える。そのため、子どもの生活の基盤である「家庭」という環境の中で、保護者が主体となって我が子にとって望ましい健康づくりのあり方を工夫しながら取り組んでいけるよう、またその意識が高まるよう実践を重ねてきた。本稿では家庭の環境を高めるシステムの一つ、健康づくりの「^{わざか}技化」を取り上げて考察をしていく。

筆者は平成24年度より組織マネジメントの視点をもった保健室の経営のあり方について実践研究をしている。筆者が構想する保健室の経営の視点は「子どもの生活が起点」であり、中長期的な見通しをもちながら創発的に展開することを特徴としている。またその関心は、能動的学習主体としての子どもの成長と、それを支える「教職員の協働」「家庭とのつながり」である。特に「家庭とのつながり」においては保健便りを家庭とのコミュニケーションツールと捉え、保護者が主体となって子どもの健康づくりに取り組んでいけるよう実践を続けている。平成25年2月に実施した保護者対象アンケートにおいて「平成24年4月と比べて保護者自身の意識、家庭での生活の変化があるか」を問うた結果、6割が「ある」との回答だった。組織マネジメントの視点をもった教育実践に

より、保護者が主体となって子どもの健康づくりに取り組んでいけるようになると捉えた²⁾。

「家庭の環境を高める」とは、家庭の中で保護者が我が子にとって望ましい健康づくりのあり方を工夫しながら取り組んでいけるようにすること、またその意識が高まるようにすること、と捉える。いうまでもなく子どもの生活の基盤は家庭であるし、健康づくりは日々の生活の中で取り組んでいくものである。家庭の中で保護者が主体となって子どもの健康づくりに取り組んでいけば、子どもは生活の中で能動的に学びながら自らの健康づくりをしていくようになるのではないかと予想する。

「健康づくりの「^{わざか}技化」」とは、家庭の環境を高めていくためのシステムの一つである。中長期的な見通しの中で、平成24年度より実践を開始した。「^{わざか}技化」によって幼稚園や学校、家庭といった子どもの「生活の場・環境」と、子どもの成長における「時間軸」とをダイナミックにつなげ、またそのつながりを活かしながら、教師と保護者とがそれぞれ主体となって取り組みを重ねていけば、子どもは日々生活の中でキーワードの技を繰り返し体験しながら、その行動を身につけていくだろうと予想した。これまでの実践では、歯みがきの“ゆらゆら”、おやつ“歯ぴかっ”、姿勢の“背骨すうー”等、健康づくりを「^{わざか}技化」し、わかりやすいキーワードで示しながらそれぞれの取り組みを継続している。

ところが、筆者はこれまでの実践が真に子どもの主体が育つものであったかと振り返らずにはおれない思いをもった。それは5歳児によくあることなのだが、筆者がそばにすることに気づくと、ぐにやりと座っていたところから、背骨を“すうー”

と伸ばすよう座り直す、といった場面に遭遇するからである。そういう時「どうして“すうー”にしたん」とたずねると「この方がいいから」「ご飯がこぼれないように」と優等生的な返事がかえってくるのであるが、5歳児ともなると教師がどんな姿を自分たちに求めているかを察して行動することもできるため、一人ひとりが納得したこだわりでもって“すうー”と座ることを選んだとはいいきれない。行動や態度、言葉といった子どもの外側にあらわれるものが、その場でのいわゆる正解か否か、という観点で子どもの成長をみとめることは危険でありはしないだろうか。

梶田(1996)は「知識や技能といった「道具」が身につくこと以上に、その「道具」を使う「主体」が育つことが重要³⁾と述べ、子ども一人ひとりの内面世界の変容・成長をもたらす内面理論に立つ教育の重要性を説いている。さらに梶田は、内面世界の成長・変容には一人ひとりに実感や納得をもたらす教育、一人ひとりの実感や納得・本音そのものを変えていく教育が重要と述べ⁴⁾、その評価においては「自分なりの実感や納得、本音を拠り所として考え、判断し、行動していく力がついてきたかどうか、を重視⁵⁾しなければならないとしている。

歯みがきの技能である“ゆらゆら”という「道具」が身につくこと以上に、“ゆらゆら”をとおして「主体」が育つことが重要なのである。筆者には子ども一人ひとりの内面世界の成長をみとめる観点が足りないことに気づいた。梶田の論に立脚し、幼児期における健康教育のあり方を考えた時、子ども一人ひとりの主体が育つよう、一人ひとりの内面世界に「気もちよかった」「うまくいった」といった実感や、「こうしたらよい」「こうしたい」という納得をもたらす実践、さらにその実感や納得、本音を変えていける、子どもがハツとなる実践としていかねばならない、といえるのではないだろうか。

健康づくりの「^{わざか}技化」は、子どもが生活の中で繰り返し体験できるよう仕組みだものである。この繰り返しの体験により、子ども一人ひとりの内

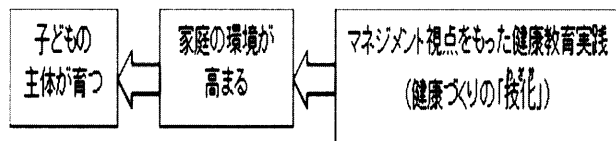


図1 研究仮説モデル

面世界はどのように変容していくのかと考えた時、実感や納得を重ねているのではないかと予想した。そのことから、主体の育ちには、子ども一人ひとりが生活の中で繰り返しの体験ができ、その内面世界で実感や納得を重ねていけるよう、「家庭」という環境が高まることが極めて重要であると考えるに至った(図1参照)。

本稿ではまず子どもの主体が育つための「家庭」という環境に着目する。次に健康づくりの「^{わざか}技化」について述べる。子どもの主体の育ちをみとめる観点は「実感」「納得」とする。考察は保護者を対象に行った「子どもの健康づくりに関するアンケート」の結果をもとに行う。家庭の環境は高まったか、そして子どもの内面世界に実感や納得をもたらすことができたか、を評価していくことをとおして、子どもの主体の育ちに迫る健康教育実践のあり方を考察していきたい。

2 「子どもの主体が育つ」ために

(1) 「子どもの主体が育つ」ための「家庭」という環境

「子どもの主体が育つ」ことをめざし、保護者や教師がすべきことは、「①望ましい習慣や行動を体験したり気づいたりできる生活の場の設定」「②その子にとって適時体験となるような配慮」「③体験の意味づけ」「④体験や学びのつながりと積み上げ」の4点と考える⁶⁾。組織マネジメントの視点をもって、この4点にいかに関与するかを考えた時、子どもの生活の基盤である家庭の中で保護者が我が子にとって望ましい健康づくりのあり方を工夫しながら、日々取り組みを重ねていけるようにすることではないかと捉えた。いいかえれば、子ども一人ひとりの主体が育つよう、①②③④に取り組む「家庭」という環境を高めてい

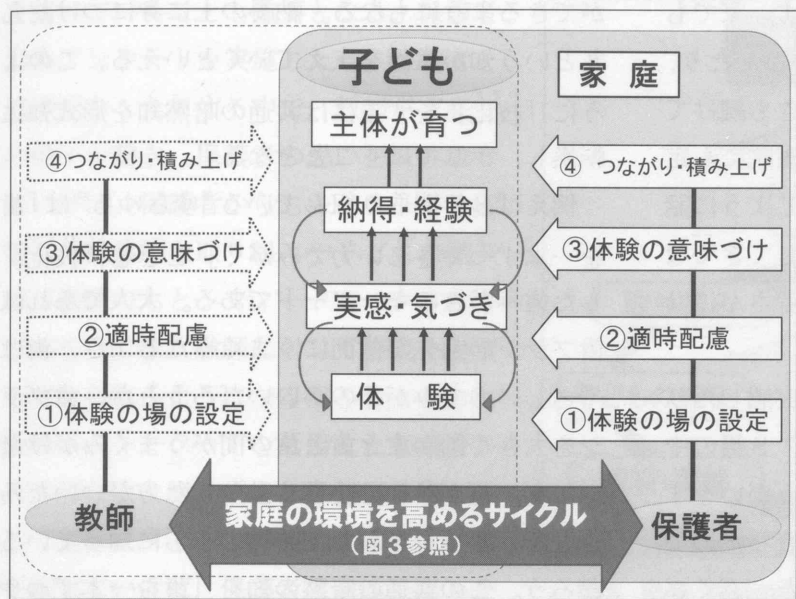


図2 「子どもの主体が育つ」環境モデル

くことが教師の役目と捉えたのである。家庭は、子ども一人ひとりの発達、興味や関心、その子がこれまで得てきた価値や感覚にフィットする体験や学びができる環境である。また子どもが「気持ちよかった」「うまかった」と実感したり、「どうして」「こうなった」と気づいたりした時、そばにいる保護者が迷わずにその体験の意味づけをしやすい環境であるともいえる。意味づけをされた体験は「こうしたらよい」「こうしたい」という納得を伴う経験として、一人ひとりの内面世界に根付いていくと考えられる。さらに様々な経験が子どもの中でつながり、積み上がっていけば、子どもは自分の経験を拠り所にしながら自ら考え自身の健康づくりをしていくようになるのではないかと予想する(図2参照)。

(2) S男のことから

子ども一人ひとりの主体が育つために、「家庭」という環境の役割が重要であることを教えてくれるS男の例を示したい。

4歳児のクラスで子どもたちと歯みがきをしていた11月のある日のことであった。「歯ブラシ忘れたからぶくぶくしよう」とS男が筆者の前をかすめ、水道の蛇口をひねった。「どうしてえ歯ブラシ忘れたらぶくぶくするん」とたずねると「これ見てするんよ」と目の前の掲示物を指さし、「ぶ

くぶくうがい”のモデルを示す筆者の顔写真を真似、自分の頬を左右交互に指で押さえながら“ぶくぶくうがい”をはじめた。「いいぶくぶくじゃねえ。で、どうして歯みがきできん時はうがいでするん」とさらにとたずねた。「ぶくぶくしたらいいんよ」とうがいを続けるS男。しつこくたずねてみた「どうしてぶくぶくなん。ガラガラじゃいけないのん」と。すると、コップを片づけながら「うー、むし歯キンを吐き出すためよ」とたった今ひらめいたようにS男は応えてくれた。なぜ“ぶくぶくうがい”

をするのかをたずねられたのは初めてで、そのことを考えたのも初めて、というような様子であった。筆者はこれまで歯ブラシを忘れた子どもに対し、どうしたらいいかとこちらからたずね、考えさせることはあった。しかし、子どもが自分でぶくぶくうがいをすると決め、さもそれが当たり前のことのように実践している光景に出合ったのはこの時が初めてだった。

子どもたちの多くは歯みがきの後もガラガラうがいをしていた。そこで9月に歯みがき後のうがいを「^{わざか}技化」し、“ぶくぶくうがい体操”をキーワードに保健指導をおこなった。指導のねらいは、歯みがき後のうがいの必要性に気づけるようにすること、ぶくぶくうがいを生活の中でやっていけるようにすること、の二つとした。その後、取り組みのねらいやキーワードを家庭と共有しながら、幼稚園の生活の中でも継続して取り組んでいるところであった。二か月前に保健指導をしている。生活の中で取り組みも継続している。しかしそれだけでは「歯ブラシを忘れてしまった」という不測の事態に直面した時、多くの子どもはどうすればいいかを自分で考え、適切に行動することはできないだろう。

S男の背景が知りたくて、翌日母親に声をかけた。「すごいじゃーん」とS男の頭をなでながら母親は次のように話してくれた。「小さい頃から

歯が弱いのか…、前歯をけがしたんです。家でも「歯みがきしないとむし歯になるよ」と話したり、絵本を読んだりして。仕上げみがきも続けています。けがのこともあり近所の歯科医院にも定期的に通っています。そこでも家と同じように話をきいています。当たり前のことしかしてきてないんですけど…。大人になったら歯医者さんになりたいんよね、S男」と。

S男にとって家庭での日々の体験が実感したり納得したりするものであったからこそ、S男の中で「歯みがきができないからぶくぶくうがいをする」と自分で決め、実践していく力が育ったのではないかと考える。また教師からきいた“ぶくぶくうがい体操”の技は、彼が得てきた価値とか感覚とかにうまく重なったのかもしれない。掲示物を真似ながらうがいをするS男の様子から“ぶくぶくうがい体操”のキーワードがS男の生活の中で活かしていることがわかる。また「ぶくぶくうがいはこうやってする」という納得を伴う新たなこだわりが、彼の内面世界に根付きつつあるようにも感じられた。

(3) 健康づくりの「^{わざか}技化」

中長期的な見通しをもちながら、子ども一人ひとりの主体が育つよう、家庭の環境を高めていくシステムの一つが「健康づくりの「^{わざか}技化」」である。「^{わざか}技化」をもとに保護者が家庭の中で取り組みを重ねていけるようにすれば、その技を生活の中で繰り返し体験した子ども一人ひとりの内面世界に実感や納得をもたらすことができるのではないかと考える。さらに「^{わざか}技化」したキーワードは子ども一人ひとりの日々の生活を支え、生活の中で生きていくのではないかと予想する。

「^{わざか}技化」は九九をイメージするとわかりやすい。言うまでもなく九九は一桁のかけ算式を形式的に示したものである。共有すればその多くの人が九九の数式を客観的に認識することが可能となる。そして九九という技を納得するものとして身につけると、その技を知らない者とは格段に違う計算力を身につけることができる。さらには生活の中でイメージとしていつでもそれを使いこなすこと

ができるようになる。納得の上に身につけた九九という知が生活を支えていくといえる。このように「^{わざか}技化」をするには共通の暗黙知を形式知に転換し、示していくこととなる⁷⁾。

例えば3年間取り組んでいる“ゆらゆら”は「歯を一本ずつやさしい力でみがく」ことを「^{わざか}技化」した歯みがきのキーワードである。大人であれば歯ブラシの毛先が歯面にうまく当たるよう、歯はやさしい力でみがくのがいいだろうとか、歯ブラシを大きく動かすと歯と歯の間がうまくみがけないから、歯ブラシは小さく動かした方がいいだろうとか、経験をとおして暗黙のうちに知っているだろう。この共通の暗黙の知を「歯を一本ずつやさしい力でみがく＝“ゆらゆら”」と形式的に示した。そして子どもとは保健指導で、家庭とは保健便りで共有できるようにすることで、共有した誰もが認識可能で客観的に捉えることができる形式的な知とした。子どもにとっては“ゆらゆら”の一言でその意味とやるべきことをイメージしやすく、能動的に行動しやすいだろう。また楽しい音とわかりやすい表現でキーワードを示せば、キーワードからイメージすることと、実際に体験した時の気づきや実感とが重なりやすく、一人ひとりが納得しながら生活の中で取り組んでいくようになると思う。また保護者にとっても、子どもに身につけさせたい行動とその意味とを理解させやすく、また子どもが納得して行動しやすいので継続的に取り組みやすいといえるだろう。

また「^{わざか}技化」したキーワードはそれぞれの家庭の状況や子どもの様子に応じ、保護者が工夫しながら取り組むことを可能にする。例えば、「仕上げの“ゆらゆら”するよ」と仕上げ歯みがきを促すことに使うこともできる。また子どもの気づきを拾って新たな形式知として取り組んでいくこともできる。「ゆらゆらでみがいた歯を指でこすると“きゅっきゅ”となった」という子どもの気づきを拾って“きゅっきゅ”を形式知とし、家庭で取り組んだ例もある。

さらに「^{わざか}技化」をもとに取り組みを継続していくプロセスの中で、教師が保護者と双方向の関係

を築いていくことも重要となる。保護者対象アンケートを実施したり、保護者と直接話をしたりする中で、教師が家庭での様子を聴き、保護者の思いを汲み取っていけば、保護者からもキーワードを活用した具体的な取り組みや子どもの様子等が教師のもとへフィードバックされるであろう。また教師に対して相談や要望も寄せられるようになるだろう。さらに教師が、キーワードを活用した家庭での具体的な取り組み例を、保健便りをとおして家庭にフィードバックすることを繰り返していけば、保護者は家族で話し合ったり工夫したりしながら、主体となっ

て子どもの健康づくりに取り組んでいくのではないだろうか。そしてその結果、子ども一人ひとり、日々家庭の中で“ゆらゆら”を繰り返し体験でき、歯をみがいた気もちよさを実感したり、そばにいる保護者から体験の意味づけを受けたりすることができるだろう。そして「歯は“ゆらゆら”とやさしい力で一本ずつみがくとよい」という納得を伴う経験が、子ども一人ひとりの内面に根付いていくのではなかろうか。“ゆらゆら”を納得の上に身につけた子どもの生活の中では“ゆりゆら”が生き続けるだろう。そして永久歯への生え変わりなどによって口の中の様子が変化しても、これまでの経験を抛り所にしながら、こだわりをもって歯みがきを実践していく主体が、一人ひとりの内面世界に育っていくのではないかと予想する（図3参照）。

3 子どもの健康づくりに関するアンケート

(1) アンケートの目的

- ①健康づくりを「^{わざか}技法」したキーワードは保護者が活用しやすいものであったかを評価する。
- ②健康づくりの「^{わざか}技法」により子どもの主体が育つよう家庭の環境が高まったかを評価する。
- ③子どもの内面世界に実感や納得をもたらすことができたかを評価する。

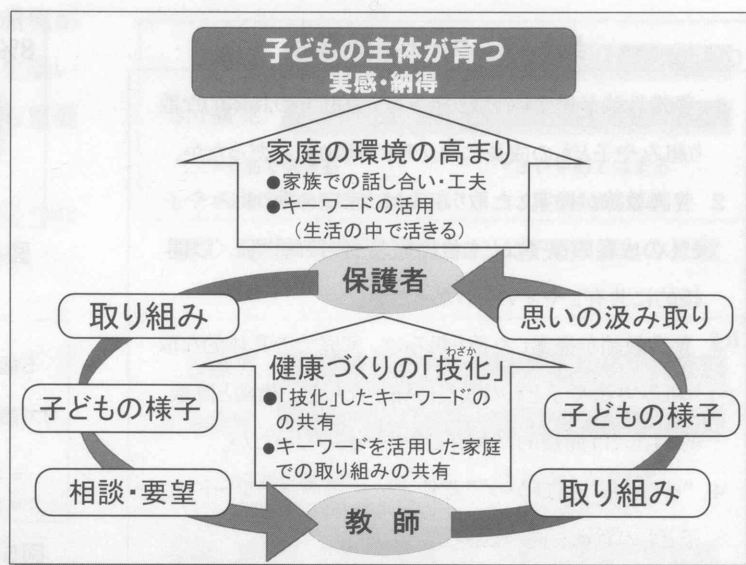


図3 健康づくりの「^{わざか}技法」から家庭の環境を高めるサイクル

(2) 対象

在園児の保護者(108家庭)とした。

但し、きょうだいで在園している場合は上の学年への提出を求めた。

(3) 調査時期

平成26年11月

(4) アンケート項目

アンケートの質問項目は表1のとおりである。評価は「4あてはまる」「3ややあてはまる」「2あまりあてはまらない」「1あてはまらない」の4段階とした。質問6～9においては、「4」「3」の回答者に具体的な記述を求め、子どもの本音や保護者の思いを知る手掛かりとした。

(5) 回収率

90.7% (98/108家庭内、3歳児：22家庭、4歳児：35家庭、5歳児：41家庭)

(6) アンケートの結果、並びに考察

①「^{わざか}技法」したキーワードの活用のしやすさ

質問1, 4において共に「4あてはまる」が58%だったことから、取り上げた内容や健康づくりを「^{わざか}技法」したキーワードは子どもの興味・関心や感覚、発達に即していたことがわかる。さらに質問5において「4あてはまる」が55%だったことや(図4参照)、記述に「幼稚園でやっている健康づくりは、家でも子どもがずっと理解してくれるのでやりやすい」「親もわかりやすく親子ででき

表1 アンケート質問項目

- 1 養護教諭が提案した取り組みは、家庭での具体的な取り組みや子どもの成長にマッチする取り組みだったか。
- 2 養護教諭が提案した取り組みは、家庭の取り組みや子どもの成長の様子などを他の家庭と直接的、もしくは間接的に共有しやすいものだったか。
- 3 養護教諭が提案した取り組みは、家庭での具体的な取り組み方法や子どもの成長の様子などを幼稚園と直接的、もしくは間接的に共有しやすいものだったか。
- 4 “ゆらゆら”“歯びかつ”“背骨すー”等のキーワードは、子どもの意欲を高めるものだったか。
- 5 “ゆらゆら”“歯びかつ”“背骨すー”等のキーワードは、家庭での子どもの健康づくりや健康教育に活用しやすいものだったか。
- 6 子どもは、親が言わなくても自分からすすんで日常生活の中で自分の健康づくりをするようになったか。
- 7 子どもは、親から言われて行動したとしても日常生活の中でなぜそうするのか必要感を感じたり、また工夫したり、考えたりしながら自分の健康づくりに取り組むようになったか。
- 8 日常生活の中で、子どもの様子や家庭の状況に応じて取り組みを工夫したか。
- 9 子どもの健康づくりをとおして、親の意識や姿勢に変化があったか。
- 10 養護教諭の取り組みに対する意見や感想(自由記述)。

た」等、わかりやすさについて30件、「キーワードを使って子どもと健康について話す機会をもてるようにした」「ゆらゆらを子どもとの合言葉にした」等、活用方法について21件あったことから、子どもの興味・関心や感覚、発達に即しながら健康づくりを「^{わさか}技化」したキーワードは家庭の中で保護者が活用しやすいものであったと考えられる。

また質問3において「4あてはまる」「3ややあてはまる」を合わせると93.8%となり、家庭と教師の間で情報の共有ができていたと評価できる。このことから、教師が保護者と子どもの様子を共有し合ったり、保護者の思いを汲み取ったりすることをおし、保護者と双方向の関係を築きなが

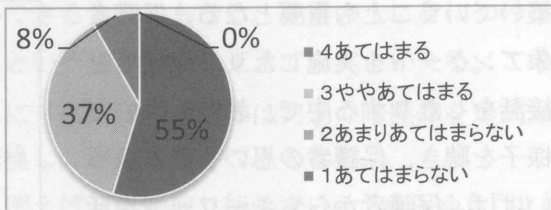


図4 質問5「キーワードは活用しやすかったか」

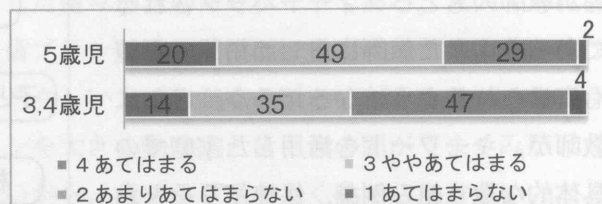


図5 質問8: 5歳児家庭と3,4歳児家庭との比較

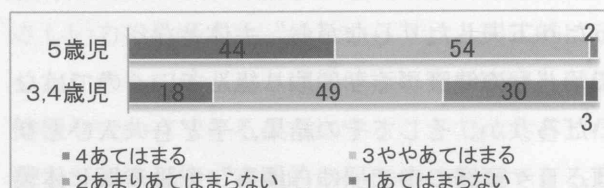


図6 質問9: 5歳児家庭と3,4歳児家庭との比較

ら、共に取り組んでいこうとしたことで、保護者がより活用しやすくなったのではないかと考える。

②家庭の環境の高まり

質問8, 9を、5歳児の家庭と3,4歳児の家庭とでそれぞれ比較した(図5, 6参照)。すると質問8, 9共に5歳児の家庭の方が「4あてはまる」「3ややあてはまる」の割合が高い結果となった。3,4歳の家庭に比べ、5歳児の家庭は、より保護者が我が子にとって望ましい健康づくりのあり方を工夫しながら取り組んだり、意識を高めたりしていると推測できる。このことから健康づくりを「^{わさか}技化」し、それをもとに取り組みを継続していくことで、家庭は子どもの主体が育つ環境として次第に高まっていくと考えられる。

質問2において「4あてはまる」「3ややあてはまる」を合わせると88%となった。また「皆さんの工夫を参考にして取り入れたり変えたりした」という記述もあった。家庭から寄せられた声や、キーワードを活用した取り組み等を、家庭同士が保健便りをとおして共有するようにしたことが、家族で話し合ったり工夫したりする支えになった

と考えられる。これらのことから、家庭の環境が高まるには、教師が保護者と双方向の関係を築いていく中で、家庭同士をつないでいくことも重要だといえる。

一方で「なかなか実行や子どもとの会話につなげることができない」という声も一件寄せられた。同じような思いを抱えた保護者は少なくないだろう。様々な保護者の思いに心を傾けながら、今後取り組みを続けていかなければならない。

③子どもの内面世界での実感、納得

記述の中に「背骨すうーについてお姉ちゃんに語り始め、これをきっかけに家族で取り組むようになった」「子どもにゆらゆら歯みがきでするんよ、と注意される」等、子どもが家族に「^{わざが}技化」したキーワードを使って教えている様子が29件あった。子どもは実感したり、心から納得したりしたからこそ「家族にも教えたい」という思いをもったのではないだろうか。このことから「^{わざが}技化」したキーワードは、実際にやってみることで「すうーは気もちよかった」とか「ゆらゆらだとうまくいった」等の実感や納得を子どもの内面世界に与えるものであると考えられる。

質問6、7を、5歳児の家庭と3、4歳児の家庭とでそれぞれ比較すると、5歳児の家庭の方が3、4歳児に比べて「4あてはまる」「3ややあてはまる」の割合が共に高い(図7、8参照)。また5歳児の家庭からは「注意すると「あっそうだった」となぜいけないかわかっている様子でした」「「～だから」と理由を言っている」等、理由を理解して健康づくりをしている子どもの様子が23件寄せられた。子どもにとって家庭は一番気もちの緩む環境であろう。そのような環境の中でも5歳児になると自分からすすんで行動したり、理由を考えたりしている割合が高くなっていく。先に述べたとおり、5歳児の家庭は子どもの主体が育つ環境としてより高まっていると考えられる。これらのことから、5歳児は生活の中で「^{わざが}技化」をもとにより多く繰り返しの体験をすることができたため、その内面世界で実感や納得を何度も重ねることができたのではないかと考える。

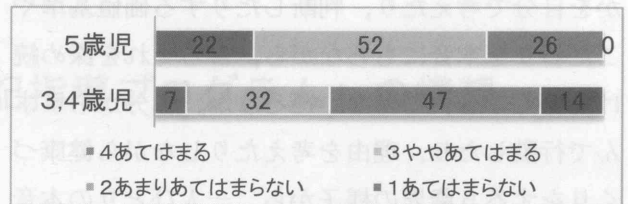


図7 質問6:5歳児家庭と3,4歳児家庭との比較

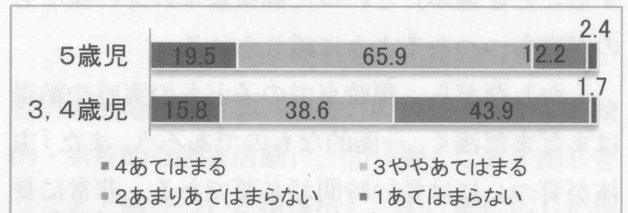


図8 質問7:5歳児家庭と3,4歳児家庭との比較

4 考察

アンケートの結果と考察から、組織マネジメントの視点をもった健康教育実践「健康づくりの「^{わざが}技化」」により、家庭の環境が高まるにつれ、次第に子どもの主体が育っていく、と考えられる。

子ども一人ひとりの主体が育つために、「家庭」という環境に着目した。そのことによって子ども一人ひとり日々生活の中で繰り返しの体験をすることができ、その内面世界で実感や納得を重ねていくことができたのではないかと考える。

家庭の環境が高まっていった背景には二つの要因があるといえる。一つは、教師が保護者との双方向の関係を築いていったことである。教師の姿勢が、保護者から寄せられた声を受け止め、また思いを汲み取りながら共に取り組んでいこうとするものであったからこそ、保護者も教師の思いを受け止め、主体となって取り組んだり、その意識を高めていったのではないかと考える。今一つは中長期的な見通しをもって取り組んだことである。これまでの三年間、「健康づくりを「^{わざが}技化」」し、そのキーワードをもとに家庭と取り組みを積み上げてきた。そのことによって子ども一人一人は混乱せずに体験を繰り返し、その内面世界で実感と納得とを重ねることができたのではないかと考える。

「主体が育つ」ということは、「いかに生きる

かを自分で考えたり、判断したりする価値基準やこだわりを本音にもちながら、自らそれを深め続けていくこと」ではないだろうか。自分からすすんで行動したり、理由を考えたりしながら健康づくりをする5歳児の様子から、一人ひとりの本音の部分に何か納得したものがあり、「自分はこうすることを選ぶ」といった価値基準の芽の様なものが育ちつつあるように感じられる。

しかしながら、現時点での子どもの実感や納得はまだまだ浅く、一面的なものであろう。また「主体が育つ」には長い時間が必要である。非常に長期的な将来を見通した中での実践が求められる。人は幼児期から実感と納得とを重ねることで、その人の生きる拠り所となるであろうものの見方や考え方、価値や感覚をその内面世界に根付かせていくのだろう。そして、そうした主体があるからこそ、人は「自分自身を自分の願いとする方向に形成していく」⁸⁾ ことができるようになるのではないだろうか。組織マネジメントの視点をもった健康教育実践「健康づくりの^{わざが}技化」は、そのような自己成長力を育ていける実践といえるのではないだろうか。今後も子ども一人ひとりの実感や納得、本音そのものを変えていける取り組みを創造し続けることで、「主体が育つ」実践を積み上げていかねばならない。

5 おわりに

子どもの主体が育つ実践としていくために最も重要なことは、教師の中に子どもの内面の成長を願い、一人ひとりの内面をみとっていこうとする姿勢がある、ということではないだろうか。筆者に与えられた養護教諭という職は、子ども一人ひとりとのつながりのなかで成り立っていく。今後も子ども一人ひとりのその時、その場での視線や表情を注意深く読みとったり、つぶやきやささやきに耳を傾けたりしていくことで、子どもの内面をみとる洞察力を高めていかねばならない。そして、子ども一人ひとりと温かい心のつながりを築きながら、子どもの主体が育つ実践を積み上げて

いきたい。

また本稿においては、子どもの主体の育ちをみとる観点を「実感」「納得」とした。しかしながら、子どもの内面の成長をみとることは大変難しく、慎重にあたるべきものとする。引き続き家庭とつながり、また教職員と協働していくことで子どもの育ちを多角的に捉えながら、子どもの主体の育ちや内面の成長をみとる観点について検討をしていかねばならない。

<注および参考文献>

- 1) 齋藤孝：「天才がどんどん生まれてくる組織」, p. 23, 2005, 新潮選書.
- 2) 経営構想、並びにこれまでの取り組みは以下を参照していただきたい。
雨宮恵子：「子どもの育ちをつなぐ保健室経営—「しめす」「みとめる」「みとる」ことの共有—」, 広島大学附属三原学校園研究紀要, 第3集, pp. 33-37, 2013.
雨宮恵子：「子どもの育ちをつなぐ保健室経営—家庭と響き合う保健便り—」, 全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会研究収録, 第48集, pp. 125-131, 2014.
雨宮恵子：「コミュニケーションツールとしての保健便りに関する考察—保健指導・保健便りに関する保護者アンケートの結果から—」, 広島大学附属三原学校園研究紀要, 第4集, pp. 41-48, 2014.
- 3) 梶田叡一：「〈自己〉を育てる—真の主体性の確立—」, p. 4, 1996, 金子書房.
- 4) 前掲書 3), pp. 127-131.
- 5) 前掲書 3), p. 167.
- 6) 前掲書 3), pp. 6-8.
- 7) 前掲書 1), pp. 21-28.
- 8) 前掲書 3), p. 11.